

今夏にも太陽・燃料電池搭載

# 無人飛行船、長期滞空へ

プラットフォーム計画

無人の大型飛行船を高空に長期間静止させるため、宇宙航空研究開発機構は二十九日までに、太陽電池・燃料電池を搭載する飛行試験を行う検討を始めた。高度約二十キロから通信・放送や交通観測などを行う「成層圏プラットフォーム」計画の二環で、今夏から秋にかけて、大樹町の実験場で実施する案が浮上している。

## 宇宙航空研究 開発機構 大樹町で試験検討

昨年十一月、情報通信一んだ飛行船を、遠隔・自律映像の放送や、地上研究機構と共同で大樹町 動操縦で高度約四キロにほ を走る車、植物の分布状で行った試験では、灯油 ぼ静止させることに世界 況の観測などを行った。を燃料とする発電機を積一で初めて成功。ハイビジ 高空で一定の場所に静

止するためには、風に流

されないよう、向きや強さに応じて電動モーターでプロペラを回す必要がある。しかし、現状の発電機では燃料を補充しないと、六時間以上滞空できない。これを厚は太陽電池、夜は燃料電池を使う方式にすれば、数年間の連続滞空も夢ではな

約六十八キロ、重さ六・四トンの飛行船を、高度約四キロで半径約百五十キロ以内にとどめることができると。機体制御技術は確立できたため、今後は滞空時間を延ばすとともに、機体の大型化が課題となる。

宇宙機構の佐々修一チーフは「燃料電池はマイナス八十度の低温、低気圧でも動く必要があり、太陽電池は気温の変動で伸縮する機体に張り付けるため、軽く薄く、柔らかくないといかない。現在開発中であり、当面は発電機と一緒搭載し、機能を確保したい」と話している。